

図書紹介

F. K. Exell: *The Land and People of Thailand*. Adam and Charles Black, London, 1960. 96 p.

The Lands and Peoples Series は、すでに44冊刊行されている。その1冊「タイの土地と人」は、すでに1960年に刊行されたが、第2刷が1964年に刊行された。この機会に、本書を紹介しておきたいと思う。

もともと、この叢書は、主としてツーリストを目的に編集されたものである。すなわち、ツーリストが訪れようとする国を、簡単に紹介しようとするものであるが、同時に各著者はすべてその国にかなり長い滞在経験をもったものから選ばれているために、たんなる紹介ではなく、著者の滞在経験がにじみ出た読みものになっている。とくに、ツーリストの興味をもつであろうところ、すなわち自然と人間の側面が重視されている。

この叢書に属する本書も、この技術を、よくそなえている。19項目からなっているが、その項目が、おのずから本書の特色を示すであろう。すなわち、気候・タイ人・バンコク・メナム河・旅行の方法・ジャングル・米・チーク・魚と漁業・タイの歴史(1200—1850)・タイの歴史(1850—1958)・儀式・アヘン・言語・スズ・狩猟・芸術と手工業・レージャー・祭。

この項目から明らかかなように、しかも全体として100ページならずだから、決して専門的な研究書ではない。

しかし、とくに本書をここに紹介するゆえんは、ひとつには、わが国でまだこういったタイ一国についての自然と人間とについて興味深く書かれた紹介書が刊行されていないことである。また、ひとつには、タイへのわが国からの旅行者が多いが、本書が対象とするツーリストだけでなく、専門的調査研究者でも、タイの概況を知らずに、タイに赴く場合が多い。いかに限られた専門領域の研究に従事する場合でも、少なくともタイをフィールド・ワークの対象におくかぎり、タイについて、ある程度のタイあるいはタイ人について

理解が必要だと思う。わたくしは、「タイは回教国だ」と確信してバンコクにこられた専門的研究者に会ったことを思いだす。

もともと、本書はツーリストのための興味本位に書かれたきらいがないでもない。たとえば、タイ人は人のよい善良な国民そのものであるように描かれてある。短時日の観光客にとっては、これでよいかも知れない。しかし、もし調査研究者がこのつもりでタイにやってきてタイで調査にあたると、とんでもないことになる恐れがある。

また、本書は、ところどころ敘述の不充分なところがある。たとえば、バンコクへは1,000トン以下の船しか入らないとあるが、それは内港のことであり、外港では1万トン近くの船舶まで入れる。また、公認アヘン吸引所のこと書いてあるが、現在では、もう消えさっている。わたくしが、本書がこのたび増刷されたとき、いくつかの諸点は訂正されるべきだったと、この「土地と国民叢書」のために惜しむ。

(本岡 武)

R. R. Rawson: *The Monsoon Lands of Asia*. Hutchinson Educational, London, 1963. 256 p.

本書は「モンスーン・アジア地理」であって、大学1年生のための教科書であることを目的としている。著者は London School of Economics の Senior Lecturer である。

最も興味をひかれる点は、モンスーン・アジアとは、どこを指すかとの、地域設定の問題である。

著者の地域設定についての基本的な考え方として、(1) その地域内部がいかに多様に分化しているとしても、地域全体をつうじての共通的特質がなければならぬ。(2) しかも、その地域は隣接地域にたいして、根本的な文化上の差異がなければならぬ。

この考え方にもとづき、モンスーン・アジアの共通的性格を物質的貧困 (material poverty) にあるとする。そして、西南アジアとはイスラム文化で区別さ

れ、北のソ連領シベリアとは経済的・社会的・歴史的
条件で判然と分かれるという。したがって、モンス
ーン・アジアとは、パキスタンからインド、東南アジ
ア、さらに中国・日本を含む一帯だとする。いいかえ
ると、モンスーンなる自然的基礎よりも、この一帯の
経済的・文化的特質に重点をおく。material poverty
の点から見て、日本もこの地域に含ませることも躊躇
しない。すなわち、「最も工業化した日本はあらゆる
部門にわたっての近代工業をもち、今日、造船業とし
ては世界第1位である。とはいえ、貧困が問題であり、
国民の半分近くが農民か農業労働者である。イギリ
スでは、20人のうち1人しか農業によって生計をた
てていないのに比較せよ」と。

モンスーン・アジアの規定については、わたくしは
異論が大いにある。たとえば、その地域に全世界人口の
約1/2が住んでいるにせよ、その共通性を「貧困」と
いう一語でもって規定するのは無理であろう。

それはともかく、本書の1/3は総論にあてられる。
モンスーン・アジアの地形・気候・自然植生・土壌等
の自然地理、歴史地理、農業・鉱工業の経済地理が要
約される。残りは各論となり、モンスーン・アジアの
地誌となり、つぎの諸章からなる。英領時代のインド
・インド共和国・パキスタンおよびカシミール・セイ
ロン・中国・日本および朝鮮・東南アジアとなる。こ
れらの地誌においては、自然条件よりも、むしろ政治
的・社会経済的な変化発展に重点がおかれている。

したがって、本書は、モンスーン・アジア全体のな
かにおける東南アジアの地理的地位を考えさせるに
は、好適の文献であるが、東南アジアそれ自体につ
いては、わずかに30ページたらずしか、あてられてい
ない。

しかも、わずか30ページの東南アジアの敘述のなか
にも、おかしいと思われる点が、かなり見出される。
たとえば、東南アジアにおいて中国人はフィリピン以
外では現地人と結婚しないと述べているが、中国人と
タイ人との混血は事実はきわめて多い。また、タイで
は農民の大半は大農場の小作人であるとするのは、い
いすぎである。あるいは、東北タイの米の低生産性を
堤防がないため水がコントロールできないせいだと説
明しているが、中央部平原でも堤防による水のコント
ロールはないのだ。これらの誤りは著者の責任でもあ
ろうが、同時に外国地誌を書くことが、いかにむずか

しいかをよく示している。(本岡 武)

Harry E. Groves: *The Constitution of Malaysia*. Malaysia Publications Ltd., Singapore, 1964. 239 p.

著者は、シンガポール大学法学部(1957年創立)の
憲法専攻の客員教授で、現在法学部長である。他に著
書として、*Comparative Constitutional Law, Cases and Materials*, 1963, New York がある。マ
レーシア連邦で、法学部のあるのはシンガポール大学だ
けであるが、マレーシア憲法の全貌を一書に著わすに
十分な地位と力量を持つ学者は、前法学部長の L. A.
Sheridar 教授と著者をおいて他にないといってよい
であろう。その意味で、Ahmad Ibrahim 氏も述べて
いるように(30 *Malayan Law Journal* xcvi),
本書はまさにこの分野での待望の書というべきであ
る。

著者は、憲法をその歴史的、政治的、社会的なコン
テキストの中で把握することにつとめており、その試
みは成功している。他の憲法の書物にありがちな催眠
剂的な効果が本書にないのは、そのせいであろう。先
ず、序論で、マレーシア憲法を理解するための基礎的
知識として必要な事柄、たとえば、領土、国民、経
済、歴史的発展、憲法史について、要領よくまとめて
いる。そして本論では、憲法の規定を追って統治の機
構と基本的人権について詳しく論じている。その際、
立法と立法による憲法解釈に重点を置く形になってい
るが、現行憲法の下での判例はまだ少ないのであるか
ら、これはやむを得ないといってよいであろう。著者
は、本書を、マレーシア人ないしマレーシアについて
よく知っている人々だけでなく、マレーシアについて
ほとんど知るところのない人達をも対象にして書いた
と述べている。著者自身アメリカの法律学者なので、
外国人として知りたいことをよく掴んで書いているこ
とも本書の特徴として挙げておこう。Ibrahim 氏の指
摘するような事実誤認(この指摘は貴重である)は、
外国人としてある程度は仕方がない面もある。

ただ欲をいえば、比較憲法的な見地からの考察と批
判をもっと加えれば、マレーシア憲法の特徴をより鮮
やかに描くことができたのではないかと思われる。著者
の経歴やこれまでの業績から見て、少くともアメリカ
憲法との比較が欲しいところである。それから外国人

の読者をも対象にしているのであれば、年表、地図、憲法全文が付属資料として付けられていないのは不便である。(園部逸夫)

Allan E. Guskin: *Changing Values of Thai College Students*. Chulalongkorn University, 1964.

米国平和部隊の Volunteer として1962年4月以来 Bangkok の Chulalongkorn 大学教育学部で社会心理学を講義して来た Guskin が、同学部の卒業予定学生7名とともに、アジア財団の財政援助を得て行なった Thai 国大学生の価値観調査の報告書である。

調査対象には Chulalongkorn 大学の理学部・教育学部・教養学部・政治学部の学生929名(男子419名, 女子510名), 医科大学予科学生203名(男子150名, 女子53名), Bangkok を始め各地の教員養成大学13校の学生1746名(男子755名, 女子991名), 合計2878名を選び、調査方法はすべて質問紙方法によることとして、質問紙は60分の授業時間中に学生が記入しおわることができるよう、工夫して作成された。

調査研究の目的は、現在社会的・経済的の激動期に直面する Thai 国の大学生が、彼等自身の教育、将来の職業、男女交際と結婚、家族等についてどんな考えを抱いているか、彼等の考え方が伝統的な価値観からの点でどれ程変わりつつあるかを、実証的に明らかにすることであった。即ち大学生が経済・社会・教育の全施策を意識の上でいかに受留めており、指導層として今後国民大衆にどんな影響を与えるであろうかの説明を企てたのであるが、同時に政策の根底としうる事実的資料の極めて乏しい現状の欠陥を補い、調査の実施を通じて将来政策の実行に当るべき人材の訓練を図る、という意味も含まれていた。その意味で本報告書は、Thai 国における社会調査の代表であり、また現在の水準を示すものと見ることができる。

調査項目の中で最大の比重を占めているのは、学生に直接関係の深い教育に関連した問題であるが、読者の関心をそそのめるのもこの部分である。調査結果によれば、学生にとって大学は安定した職業に就くための準備教育の場であり、望ましい専門職の第1位には教職、第2位には医師が挙げられ、軍人や実業家とくに商業・農業に対しては極めて低い評価しか与えられていない。それ故大学は恰かも官公吏の養成機関である

かのような観を呈し、その教官や教育方法もこの趣旨に適ったものが学生から望まれている。このような傾向は首都よりも地方の学生、男子よりも女子の学生、一般学生よりも教員養成大学学生に一層顕著である。教育に対する考え方も含めて、学生の全般的な気風と価値観は、わが国の教育史に例を求めるとすれば、明治前期の学生気質に大正期のそれを少々加味したものと言うことができよう。そこには古風な保守的態度と民族国家主義に加えて進歩的意識の奇妙な混淆が見られ、西洋人である Guskin はこの矛盾と不合理の説明に困難を表明している。しかし東洋人であるわれわれには、寧ろ親近感を覚えるものが随所に見出されるのである。

調査結果の解釈と考察は、幾分平板であると言わざるを得ない。これは質問紙法にのみ頼った調査方法の故であって、例えば熟練した調査員による面接法を併用して居れば、遙かに intensive な成果が得られたに違いないと惜まれる。(山口三郎)

Thomas Henry Silcock: *Southeast Asian University, A Comparative Account of Some Development Problems*. Duke University Press, North Carolina, 1964. xiii + 184 p.

著者 Silcock は、1938—49年 Raffles College, Singapore にて、1949—60年 University of Malaya にて、教授として経済学を講じ、*The Economy of Malaya* (1963), *The Commonwealth Economy in Southeast Asia* (1957) など経済学に関する数冊の著書の他、多数の論文があり、現在は、Institute of Commonwealth Studies の Senior Research Fellow である。(マラヤ大学の名誉教授であることは、本岡武氏が、第2巻第4号で言及されている。)

本書は、つぎのような著者の個人的経験をもとにして書かれたものである。(1) マラヤ大学で経済学を教授するかたわら、教養学部長や副総長代理の職責にあったこと、(2) 東南アジア諸国の、主として経済学関係の学者との交流、(3) 1960年に行なった調査旅行(北はホンコンから南はインドネシア、西はビルマから東はフィリピンにわたる)。

本書の内容は、つぎの六章から成っている。(1) 学問的価値と大学の役割、(2) 1960年までの東南アジアにおける大学の発達、(3) 大学の財政および自治、(4)

職員・学生・教育, (5) 言語, (6) 調査。

ところで、東南アジアの大学の過半数は、第二次大戦後に設立されたものであり、特に最近、高等教育就学者の量的増加率は、めざましい。この高等教育の驚異的發展の原因を、著者は、(1) 戦前における中等教育の発達、(2) 日本軍の進軍に伴い教育の重要性を高く評価したこと、(3) 新興独立国が教育費への支出を大幅に認めたことなどに求めている。

とくに、第二章では、ビルマ、タイ、カンボジア、ヴェトナム、ホンコン、フィリピン、インドネシア、マラヤおよびシンガポールにおける諸大学の概要を紹介的に述べている。第五章の言語問題については、母国語の台頭を指摘している。すなわち、過去は、教授用語として、英語・フランス語・オランダ語・タイ語の四ヶ国語であり、宗教教育面において、パーリー語・アラビヤ語・ラテン語が使用されていたに過ぎなかった。ところが、現在では、オランダ語が衰退した反面、ビルマ語・クメール語・ヴェトナム語・シナ語・マレー語が、抬頭してきている。

本書の論旨は、東南アジアの諸大学が、欧米先進国の制度の単なる模倣であってはならず、あくまでも東南アジア独自の文化的土壌に適合した教育制度を確立することにあると思われる。

なにはともあれ、本書は、啓蒙的、示唆的なものを多分に含んでいるのみならず、類書の稀少性からも、好個な労作たりうると信ずる。(門前貞三)

F. M. LeBar and others; *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*. HRAF Press, New Haven, 1964, x+288 p.

本書は Human Relation Area Files に所属する LeBar 博士を中心に G. C. Hickey, J. K. Musgrave 両氏のほか何人かの専門家が協力して、G. P. Murdock 的方法論にもとずいて執筆され、編集されたものである。

南中国、インドのアッサム地方、東パキスタンのチッタゴン丘陵地帯、ビルマ、タイ、ラオス、カンボジア、ヴェトナム、マレーシア（マレー半島）にわたる現在までに出版された数多くの論文や書籍、さらにそれら各国で仕事をしたフィールド・ワーカーとの文通などにより集積された資料を基礎に作成された本である。

内容を大別すると、第一部 Sino-Tibetan, 第二部 Austroasiatics, 第三部 Tai-Kadai, 第四部 Malayo-Polynesian に分かれていて、各部はさらに細かく分類されている。扱われている民族集団は約 156 にもおよび、おのおの社会・文化について触れている。

断片的な資料を古今東西の文献から採集して、このような形で集大成した編者たちの努力はたいへんなものであったと思われる。また同時に HRAF にも見られるようなアメリカにおける文献利用の組織能力には驚嘆せざるをえない。このような豊かな資料にくわえて文献目録や美しい色ずりの大型民族分布図はたいへんに親切なものであり、役に立つ。すでにその民族分布図はタイ国政府の山地民関係の出先機関では利用を始めている。端的にいうとこの本は大陸部東南アジアの民族に関する百科辞典的性格を持つものといえよう。

しかしながら、編者や筆者が複数なうえに、断片的な資料を文献から集成したために、内容的にはいささか不統一のきらいがある。それに百科辞典的な書物が持つ無味乾燥な傾向はさげがたいようである。そのため、できのよい民族誌を読んでいるように通読して面白いというたぐいの本ではない。また引用文献が英語に片よっているのも将来是正されなければならないであろう。

以上のような問題はあるにせよ、主任編集者の Le Bar 博士は意欲的に現在おこなわれている東南アジアにおけるフィールド・ワークの成果をさらに取り入れ、何年か先には本書の改訂版を出すことを希望していると述べているので、この本がやがて大陸部東南アジアの民族誌の“決定版”として成長してゆくことが期待できる。その意味で、本書がこのような形で出版されたことは意義深いといえよう。この種の地味な仕事に取り組まれた編集者たちに敬意を表したいと思う。

いずれにせよ本書が人類学者をはじめとする東南アジアの地域研究者にはたいへんに便利で有益な本であることは間違いはない。とりわけ研究室には不可欠の本であろう。(飯島 茂)

Nguyen Thai: *Is South Vietnam Viable?* Manila, 1962. xii+314 p.

南ベトナムの情勢は、ここ数年表面的にはいくつかの大きな変化を示した。けれども、国際政治の Sub-

system としての問題の性質や国内の諸底流は、それにも拘らず、根深い連続性を保っている。この Nguyen Thai の著作は、特に Ngo dinh Diem 政権への批判として書かれたものであるが、南ベトナム社会の内蔵する基本的な諸問題に対する理解への示唆をもっていると考えるので、ここに紹介することにした。ちなみに、著者は1954年以来 Vietnam Press (official news agency) 政権にあっての総支配人などを務め、1961年末この政権に見切りをつけて米国に亡命した。

本書は六つの章から構成されており、第一章では著者の基本的命題である「南ベトナムの政治的危機は行政的リーダーシップの問題である」という点が定式化される。かれはいい切っている：南ベトナムでは、政府と人民の関係こそが米国の援助によって支援された反共産主義戦略プログラムの成功あるいは失敗を決定するであろう、と。〈Democracy〉のもっている問題は internal かつ domestic なものでその administrative leadership の失敗が政治的危機の根源であると理解するのである。

行政上の問題の一半は、しかし、伝統的・植民地的社会の官僚制や行政組織の望まれざる遺産であるし、加えて戦時という特殊事情の結果でもある。この分析が第2章のテーマである。patronage, nepotism, corruption, opportunism が行政組織に浸透し、技術的・行政的墮落を招く一方、有能な人材を一致して政府に動員することに失敗し、大衆の支持は失われる。

第3章から第5章までの三章は専ら Ngo dinh Diem 体制の解剖に当てられている。そこでは清廉潔白で情熱的な nationalist leader である Diem の権力への抬頭とその体制が示したいくつかの矛盾が明らかにされる。著者は、「成功的な民族的・革命的指導者が必ずしも有能な行政家ではない」という仮説を検証しようとしている。第3章では、Diem 体制の ideology とその実践が、第4章では、〈聖家族〉のメンバー達の分析が、そして第5章ではそういう支配のもたらした行政的破綻が指摘される。この三つの章は、量の上からも全体の2/3を占め、著者の特殊な立場も手伝って Diem 政権の内側からの鋭い分析になっている。特に第4章は〈The Invisible Government〉この種のものとしては記録的な価値をもっているといえよう。

第6章は結論の項であるが、全編の分析が基本的に、はそうであったように、アメリカ型の組織論——leg-

itimacy vs. effectiveness——の西洋的合理性に溺れ過ぎてはいないかという懸念が残る。従って Diem 体制の分析評価は今少し、根深い社会の底流から行なわれるべきであるという気もする。その点で、この書の情動的要素をより高く買っておく。(中野寿一郎)

Frances A. Bernath: *Catalogue of Thai Language Holdings in the Cornell University Libraries through 1964*. [Data Paper: Number 54] Southeast Asia Program, Department of Asian Studies, Cornell University, Ithaca, New York, 1964. v + 236p.

祝儀・不祝儀の「引出物刊行物」、すなわち「Nangsü Čhaek」が、タイにおける過去の serious な出版物中の重要な部分を占めて来たという事実は、これ迄意外な程に人の注意を引かなかった。「Nangsü Čhaek」とは文字通り「配る (Čhaek) 書物 (Nangsü)」であって、それが印刷される因縁となった何かの儀式——たとえば葬儀、加寿の祝儀、記念式典など——に偶々列席しその頒布を受けた者以外の目に触れる機会は誠に少なく、一般にはその出版の事実すら知られぬままに死蔵され遂には散佚してしまう場合が多かったものと思われる。「Nangsü Čhaek」が一般読書人の物となり得る現在ほとんど唯一とも言える場所はバンコクの王宮前広場 (Sanam Luang) の一隅に列をなす街頭大書店の Kiosk である。足まめに根気よく Sanam Luang へ通うことがタイの出版界の消息通となるための必要条件である理由はここに存する。今日までタイ語図書の出版目録が殆ど現われなかった原因、4921点の文献蒐集に前後十数年を費し、その目録が未整理のままさえ優に Data Paper の一巻を飾る価値のある理由はタイの出版事情のかかる特殊性を背景に理解される必要がある。

Lauriston Sharp, William Gedney 両教授の協力で始められた。Cornell 大学のタイ語文献の組織的蒐集事業が、同大学図書館の手に引継がれ今日も着実に進められているということは聞き及んでいたが、本書の出現によってその蒐集の全貌が公にされたことはタイ研究の進歩のため誠に喜ぶべきことである。幾多の困難を克服し先駆的なタイ語文献の蒐集事業をここまで育て上げた関係者の努力にあらためて敬意を表

すると共に、この「目録」がやがて *annoted bibliography* へと発展することを期待して止まない。

本書はおそらくかなりの長期に亘って作成された図書カードを著者名にしたがいアルファベット順に配列しこれを写真版にしたものと見られる。並べられたカードの記載方式に若干の不統一が見られるのはこうした理由によるものであろうか。

本書は著者名の表示に際し、Chū と *namsakun* とを一つの複合単位として把える方式を採用しているが、これはタイ語の慣用に沿った試みとして推奨に値しよう。(屢々 *namsakun* を *surname* として扱う方式が見られるがこれは実情に合わない：Sarit Thanarat は Čhompon (元帥) Sarit であって Čhomphon Thanarat と呼ばれることはない。)

また葬儀の際の *nangsū čhaek* を *cremation volume* と表示し、これが故人の略歴を含むか否かを一々明示してあるのはこれを WHO WAS WHO として利用する者にとって極めて有益である。

ただタイ文字のローマ字転写について言えば、母音ではじまる *chū* を略記する際の便を考えたあまりに *glottal stop* を一々 *q* で表記してあるのはいささか繁雑である。(Qamerica=America) 編者の意図は、タイ語式に *S.* の代りに *Sq.* とすることに踏み切ることによって無理なく実現するのではあるまいか。

いずれにせよタイ語文献利用者の指針として本書の果す役割りは大きい。今後これにならって各方面のタイ語文献 *collection* が公開され、それらのすべてが網羅的な総合文献目録へと集大成される日の一日も早くからんことを期待したい。(石井米雄)

R. K. Sprigg: *A Comparison of Arakanese and Burmese on Phonological Formulae: Linguistic Comparison in South East Asia and the Pacific*. School of Oriental and African Studies, Univeresity of London, 1963. pp. 109-132.

ビルマ語方言の内でも比較的古い形を残しているとか、発音が綴字法に忠実であるとかいわれている「アラカン方言」については、今までにも、緬・英両文による報告が幾つかあった。しかし、アラカン方言とは具体的にどのような構造をしており、標準ビルマ語との間にどのような対応関係をもっているのかという事になると、残念ながら従来文献だけで十分な理解が

得られるとはいえない状態にある。

この論文の著者は、実際に *informant* を利用して、まずアラカン方言の音韻体系を明らかにし、ついで標準ビルマ語との間の対応関係を、Prosodic Analysis を用いて示している。著者は、アラカン・ビルマ両語を Tone, Quality, Voice Quality, Labialization の4視点から、各々2種, 3種, 2種, 5種に分析し、対応関係を設定した。ここで認められる規則的な対応系列は、Tone の1型と2型, Quality の *z, m, k*, Voice Quality の *g* と *g (=non-g)*, Labialization の *s, c, ə, f, b* である。この内、*z* は $-V\#$, *m* は $-V\eta$, *k* は $-V?$ を示し、*g* は従来 Creaky Tone (J. A. Stewart), Tone III (W. Cornyn, R. I. Mc David), Tone 9 (R. B. Jones) 等と称されているもの、*S* は *spread*, *c* は *centralized*, *f* は *fronting*, *b* は *back vowel* を含んだ各 *syllable* を意味する。

以上の例を見てもわかるように、この論文には著者独自の略語が頻繁に用いられているので、あらかじめ各略語の概念をはっきりつかんでおかないと、全体を理解する事が容易でない。この事は、前作 *Junction in Spoken Burmese* (1962) についてもいえる。分量の割には、内容が難解だといわれるゆえんである。

紙数の大半は、*b, s, ə, f, c* 各 *Syllable* の分析とその対応関係とにさかされているが、内容としてもこの部分が一番充実しており、各節毎に詳細な *exemplification* がある。殊に、アラカン方言の特徴ともいえる *Rhotacization* に関する説明は、群書の中で類を抜くといっても過言ではなからう。ビルマ語に関心をもつ人たちに一読をすすめたい。

ただ難点をいえば、この論文の目的が、Phonological Formulae の作成におかれている以上やむを得ない事ではあるけれども、言語史との関連性が全くみられない点である。また、アラカン方言は、標準語には認められない特異な語彙をもっている事でも有名であるが、それらの考察も全く除外されている。標準語の動詞1002に対して、アラカン方言が667しか対象とされていない事も、はじめから対応成立の確実な語彙のみに焦点を絞ったからにはほかならない。いわば、定形化し易いものだけをとりあげて、その他の扱い難い剰余部分は、完全に切り捨てたという感じである。

(大野 徹)